

第19話 山崎の戦い

備中にいた羽柴秀吉が、疾風の如くに兵を収めて東上して、山城の山崎に逆心明智光秀を破る。秀吉の威名が一時にあがる。

本能寺の変の知らせが、備中(岡山)の羽柴秀吉のところに着いたのは、その翌日、すなわち、天正10年6月3日でした。この時、久しく水攻めにしていた高松城は、まさに水底に沈もうとしていて、これを救いに来た毛利輝元は、秀吉に和睦の相談を持ち込んで来ていたところでした。

本能寺の変の知らせを手にして、勿論、秀吉は大いに驚いたが、しかし少しもあわてなかった。彼は全く自分一人の胸にそれを収めて、平然として和睦の相談を続けて行った。先づ当面の敵との間をはっきりと有利に解決してから、兵を京都に返して、厚い恩顧を受けた亡君のために甲斐合戦をしようと決心したのです。

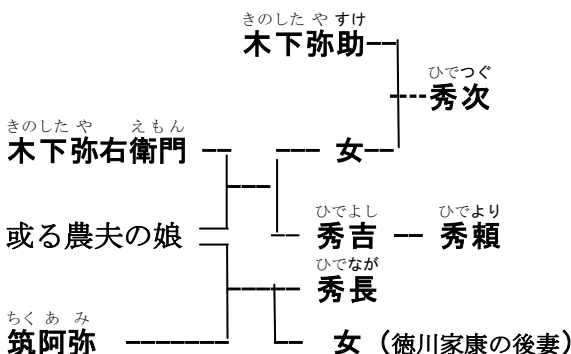
秀吉の素性

しかし皆さんは、この羽柴秀吉が、後の太閤、豊臣秀吉であることはよく知っているでしょう。彼が尾張の貧しい農家に生まれたことも、その顔がいかにもよく猿に似ていたので、幼名を猿と呼ばれていたことも。又、8才の時に父を失い、寺に小僧にやられたが、頗る腕白で、手習いやお経を読むことを嫌い、いつも子供を集めて戦争ごっこばかりをしていたので、親許に帰されたという事も知っていますか？

生まれたのは後奈良天皇の天文5年で、誕生地は尾張国愛知郡中村(今の名古屋駅の西約4kmの中村公園内)です。父は木下弥右衛門といって、もとは織田信秀の足軽でしたが、ある戦争で足に負傷して不具になったので、中村に退いて農業を営んでいたのです。

母は、後に大政所といわれた名高い人ですが、もとはやはり同じ愛知郡の小曾根村の農家の娘です。父の弥右衛門が早く亡くなったので、母は秀吉とその姉を連れて筑阿弥という人に再び嫁しました。筑阿弥もまた、もとは織田氏に仕えていたが、病気のために中村に帰って来ていたのです。

ですから、これを系図にして見ると次のようになります。



秀吉の出世

第19話 山崎の戦い

16 才の時に、秀吉は遠江の浜松に行って、たまたま道で出会った同国久能の城主松下嘉兵衛之綱の下部となったが、居ること2年、18才の時に去って尾張に帰り、清洲へ行って信長に仕えた。この頃、すでに木下藤吉郎と名乗っていました。初めは信長の草履取を勤めたが、昼夜油断なく励んだので、次第に重く用いられて、ついに一方の大將に取り立てられました。

まだ草履取をしていた頃の事ですが、冬の寒い時に、信長の草履を自分の懐に入れて、あたためておいて褒められたこともあれば、又、ある雪のひどく降った朝に、信長がいつもより早く起きて玄関に出て、「誰がいるか？」と呼ぶと、「藤吉郎」と答えて、1人だけ出仕していたので、褒められたこともあります。

又、ある時、清洲城の塀が180mばかり崩れたのを、その役の者に修理させたが、日数を経ても中々出来上がらなかったのを、藤吉郎に普請奉行を命じると、彼はこれを18mづつ10組に分けて、それぞれに人足を割り当て、めいめいの持場々々に全力を注ぐようと、自分が先に立って世話を焼いて回ったので、忽ちの間に完成して信長に褒められた事もあります。

万事がそういう風で、機敏で、忠実で、鋭い才知を働かせた上に、骨を惜しむというようなことが少しも無かったので、頗る信長の気に入って、ずんずんと出世したのです。

やがて彼は苗字を改めて羽柴と名乗ったが、これは信長の武將丹羽長秀と柴田勝家との武勇を慕って、これにあやかるようにと2人の苗字を1字づつ取ったのです。

天正元年8月に信長は、近江の浅井氏を滅ぼしたあとで、その旧領二十二万石を秀吉に与えて長浜に居らせた。更に数年の後には、中国地方征伐の大役を彼に一任した。いかに信長の信任の深かったがわかります。

備中の高松城

さて、備中の高松城を秀吉が全力を挙げて陥れようとかかったのは、天正10年の5月でした。城はいわゆる平城で、平地を抜くこと僅かに3.6mばかりの石垣の上に築かれているに過ぎないが、その三方は深い沼で、残る一方は掘りに臨んでいるので、容易に近づくことが出来ない。しかも、城主は毛利方の名將として知勇兼備の誉れの高い清水宗治です。初め秀吉が、「備中1ヶ国を与えるから、織田家の身方になれ」と勧めた時に、「忠臣は2君に仕えず」と言って撥ね付けた宗治です。これが総勢凡そ6,000人を以って死守しているのです。

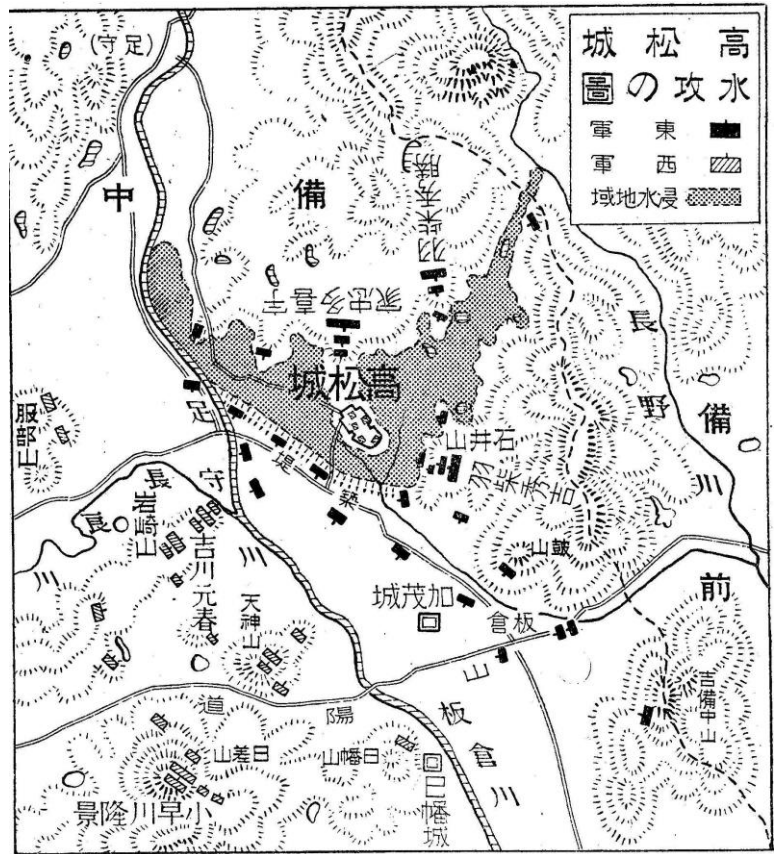
急にこれを落とそうとすれば、こちらは大損害を受けるに決まっています。さすがの秀吉もこれには困りました。

水攻の策

ところが、折から5月の五月雨時で、毎日雨がびしょびしょ降っている。そして、近くには足守川が城の西から西南に流れ、長野川が東北を流れている。城のあるところは低いが、周囲の八幡山、石井山、日旗山、天神山、岩崎山、服部山などは皆高い丘です。そこで秀吉は考えた。この地形と季節を利用して、持久の策を定め、城を水攻めにしてくれようと。

すなわち、足守川を城の西方の門前村で堰き止め、堤防を東南に向って築いて、石井山の一角、蛙ケ鼻というところまで到らせることにした。

その長さは2.8 kmにもわたり、高さは7.2 m、底の巾は2.2 m、頂の巾は11 mだったという事です。そして一方、長野川を長野で堰き止め、西南の溪間を通して、城に流れ込まして、足守川の水と合流させることにした。上からは雨が降る、城地は低い、2つの川の濁水は滔々として四方から流れ入って来る。忽ちにして城の周囲は一面の泥湖と化しました。



毛利輝元は、これを聞いて、伯父の吉川元春、小早川隆景らと共に、30,000余の兵を率いて城を救いに来ましたが、秀吉の守備が厳重なために、いかんともすることが出来ない。しばらくは空しく対陣していたが、そういううちにも、城はますます水に浸されていく。

ところで輝元は、安芸の安国寺の恵瓊という坊さんが、秀吉とも懇意にしていたのを思い出して、急にこれを喚んで、6月2日に使者として秀吉の陣にやって和睦を請わせた。備前、備中、美作、因幡、伯耆の5ヶ国を割譲するので、その代わりに高松城の囲みを解いて、将士を助けて貰いたい、というのがその条件でした。しかし、秀吉は承知しなかった。

しかし恵瓊は間に立って、その翌3日の日もなおしきりに和睦を成就させようと奔走していた。

その日です、本能寺の変の知らせを秀吉が受けたのは、秀吉ははっとした。

とはいえ、彼はこれを色にも表さなかった。全く平日の通りに振舞っていたのみならず、次のような狂歌を作って、諸陣に触れさせたということです。

両川のひとつになって落ちぬれば 毛利高松もくづにぞなる

けれども、機敏な彼の事です。勿論、腹の中では、ぐづぐづしてはいられないと思ったので、急に恵瓊を呼んで、もし毛利氏が宗治を自殺させたら、和睦をしてもよいと言った。

清水宗治の自殺

しかし恵瓊は、毛利氏がいかんにしても清水宗治を助けようとしていることをよく知っていたので、これは毛利氏を説くよりは、寧ろ直接に宗治を諭したほうが和睦の捷徑だと考えた。彼は船で城に行って、その事を宗治に言った。宗治は、「もとより命は惜しまない。毛利家のためにもなり、城中の兵士も助けられるならば、喜んで切腹しよう」と言った。話は決まった。切腹はその翌4日にすることにした。

その日になると、秀吉は検使として堀尾吉晴を城中に遣わしたが、その際、籠城の苦を慰めるしるしとして、酒、肴を贈らせた。宗治は喜んでこれを受けて、兄月清および5人の家来と共に乗った小船にそれをも載せた。そして検使と共に秀吉の陣屋の前の蛙ヶ鼻に漕いで出た。そして贈られた酒、肴で最後の酒宴を開き、快く飲んだり食べたりして、舞をも舞い、

うき世をば今こそ渡れ 武士の名を高松の苔に残して

という辞世の句を詠んだ上で、心静かに切腹した。時に年は46才でした。残る6人の者も皆自殺した。

検使がこれらの首を持ち帰って、秀吉の実検に具えると、彼は大いにその忠義に感じて、特に宗治の首を葬ったところには、五輪の石塔を建てて墓標とした。この首塚は、もとは石井山の蛙ヶ鼻にあったが、明治42年に移されて、今は高松城の本丸の址に在る。後に、大正天皇は、宗治の忠義を嘉せられて特に従四位を贈られた。

和議の成立

さて、恵瓊は毛利氏の陣中に赴き、宗治らの自殺の顛末を述べて、和睦を勧めた。輝元らはこれを見て驚きもして、又、残念にも思ったが、今更仕方のないことでしたので、宗治の死を空しくしないためにと、すなわち和睦を諾して、伯耆の八橋川および備中の河辺川を以って両分の境界とすることにした。そこで秀吉は高松城を収めて、城中の士卒を毛利氏に送り還して、その翌日、すぐに軍をかえした。

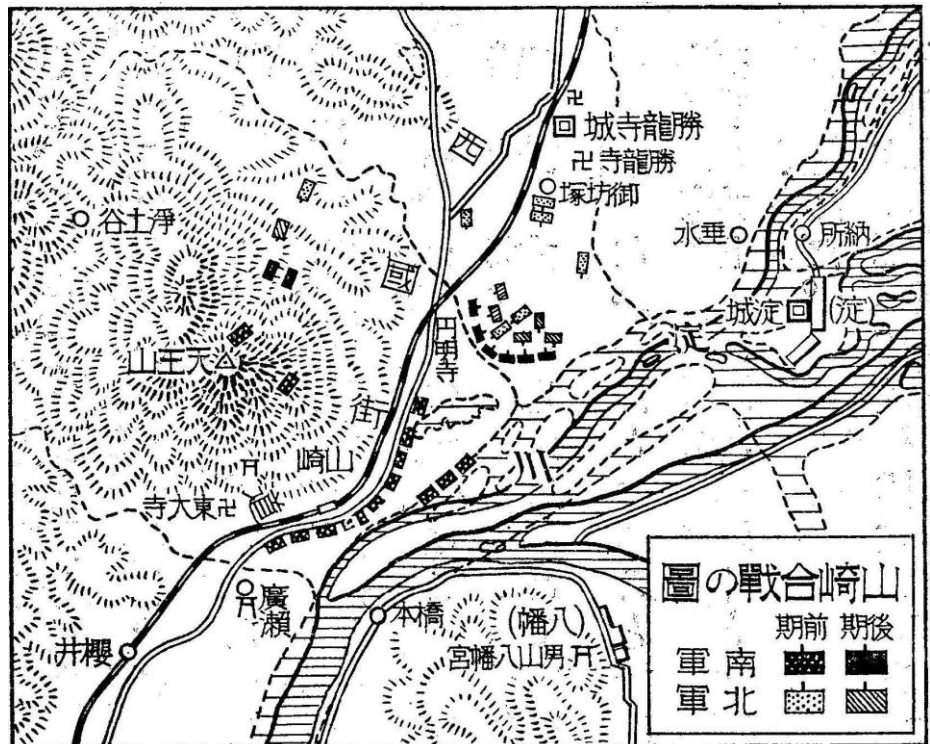
毛利氏は6日になって始めて本能寺の変を知ったが、先の約束を重んじて、敢えて秀吉を追撃しなかったという事です。

秀吉は6日に姫路城に着くと、すぐに弔い合戦の準備をして、11日には攝津の尼ヶ崎まで進んだ。

山崎の地形

案外にも早く秀吉が引き返して来たのに驚いたのは明智光秀です。彼はこれを山崎(山城国乙訓郡大山崎村)に防ぐことにした。

山崎は京都の西南約12km余りのところに在り、淀川を隔てて男山に対し、うしろには天王山を控えている。其の巾は僅かに110m余りに過ぎない



第19話 山崎の戦い

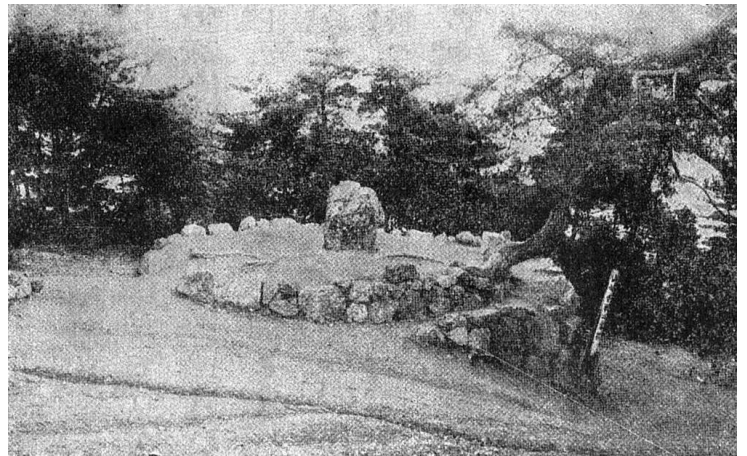
ような狭いところですが、一方で、淀川にも通じて、また一方は、中国街道にも通じる要地でして、この地を固くおさえていけば、容易に敵は京都に入ることが出来ないのです。

しかし、その代わり、一旦これを奪われると、忽ち京都をもまた敵の手に渡さなければならないでしょう。それで、光秀は固くここを守ることにしたのです。彼は勝龍寺城（山城国乙訓郡新神足村勝龍寺）を根拠地として、兵を天王山に出すと共に、自分は山崎に陣取った。

とむら かつせん 吊い合戦

一方、秀吉は、この時にはすでに四国征伐の途中から引き返して来ていた織田信孝、丹羽長秀らと軍を合わせて進んだが、13日の未明に、先づ堀尾吉晴らを天王山の敵に当らせ、自分は山崎に向かって兵を進めた。忽ち激戦が始まった。すると、その真っ最中に、秀吉方の一隊が急に進んで光秀の軍のうしろに出ようとした。押し包んで前後から討ち取ろうとしたのです。光秀の軍は、これに脅かされて、忽ち潰走した。

明智光秀は辛くも逃れて、勝龍寺城に入ったが、すぐまたここをも攻め囲まれて、支えられなくなった。あわてて逃げて、本城の近江の坂本城へと志して行く途中に、山城の小栗栖（今の京都伏見区小栗栖）で、蜂起した土民のために竹槍で突き殺された。時に年は57才でした。実に、本能寺の変から僅かに11日の後です。



おとくに 乙訓郡山崎町 天王山の古戦場

何という機敏な秀吉だったでしょう！ 実に驚くべきではありませんか。

あけち みつはる こすいわた 明智光春の湖水渡り

この山崎の敗軍の知らせが、その夜中の12時に安土に着いた。ここを預っている明智左馬之助光春は、一度は籠城をとも思ってみたが、忽ち士卒の多くが逃げ失せてしまったので、翌14日の未明に、火を天守閣に放って城を悉く焼き払い、僅かの兵士を率いて坂本城へと落ちて行った。ところが、大津まで来ると、早くも秀吉の先鋒の堀秀政らの軍の進んで来たのと出会ったので、すなわち一戦を交わしたが、衆寡敵せず、忽ち士卒を悉く討たれて、自分ただ1騎となった上に、陸路は、湖水の端まで敵の軍勢が満ちみちていて、駆け抜けて行く由もない。

と見ると、彼はいきなりざんぶと馬を琵琶湖に乗り入れた。馬は名に負う大鹿毛です 声をかけ、息をくれ、漫々たる湖水の上を、引き上げ引き上げ行くさまは、実にあっぱれな見ものでした。さすがに秀政らの軍兵も、汀にならんで、やんややんやと褒めそやしているうちに、光春は遙かに泳ぎ渡って唐崎に上陸した。有名な明智左馬之助光春の湖水渡りがこれで、光秀が謀反の軍の中では、これ1つが朗らかな話

第19話 山崎の戦い

だい
題となって伝えられています。

さかもと らくじょう 坂本の落城

さて、^{みつはる}光春は、^{しばら}暫く唐崎の松の下で休んでいたが、間もなく敵の軍兵が^お追い^{せま}迫って来るのを見ると、^{ふたた}再び馬に乗って、しづしづと坂本の町まで行って、ある^{どう}堂の前で馬から^お下りた。手綱の輪を^{たづな}切^わって^き堂の^{どう}格子^{こうし}にくくりつけて、さて^{やた}矢立^{けいたいよう}て（注：携^{すずり}帯^{ぼこ}用^と硯^だ箱^{かいし}）を取り出して、^{みつはる}懐紙^{みつづみ}に、「^{わた}光春が湖を^{わた}渉った馬」と書いたのを^{たてがみ}鬘^{むす}に^{ある}結びつけて、^{ある}自分は歩いて坂本城に入った。そして、^せ攻^よめ^{ひでまさ}寄せて来た秀政らの軍といさぎよく一戦して後に、城に火をかけて^{じさつ}自殺した。

一方、^{ひでよし}秀吉は、この14日に進んで大津に来て^{すす}本陣^{おおつ}を^{ほんじん}三井寺^{みいでら}に置いた。この時にはもう、^{いちはや}彼が^{ぼう}逸早く亡^く君^{あだ}の^{むく}仇^{もうしゅう}を^は報^{ほま}いて、その^と妄^{とお}執^{ひろ}を^{いた}晴^{つた}らした^{いめい}誉^あれは、遠く^あ広く^あ到るところに^あ伝^あわって、その^あ威^あ名^あが一時に^あ揚^あがると共に、^あ近^あ畿^あの^あ諸^あ将^あは^あ相^あ率^あいて^あ彼の^あ部^あ下^あに^あ付^あこうとして^あ来^あて、その^あ陣^あ門^あの前^あは^あ市^あを^あなしたと言^あわれます。

（ 第19話 山崎の戦い 終わり。 次は前頁に戻り、 第20話 賤嶽の戦い 〜）